

特集 4 過敏性腸症候群の 診断と治療2026



おくむら としかつ

奥村 利勝

旭川医科大学 理事・副学長・医学科長

要旨

日常診療で遭遇する慢性的な便通異常を訴える患者さんの中に、過敏性腸症候群 (IBS) の患者さんが高頻度に存在する。IBS の診療には器質的疾患を除外するという観点からはプライマリ・ケア医, 内科医としての診断能力が問われ, 病態理解には脳腸相関の理解が不可欠である。

現時点では, 国際基準である Rome IV, そしてまもなく公表される Rome V (2026年5月公表予定) に沿って診断する。現在は対症療法が主体であるが, 単に表現系としての便秘や下痢, 腹痛への対応に加えて, 今後は, 「脳腸相関改善薬」といった根本的治療法の開発が望まれる。この分野の今後の研究の発展に期待する。

キーワード

過敏性腸症候群 (IBS), Rome 基準, 脳腸相関

語句解説

対特集
談 1

特集
2

特集
3

特集
4

特集
5

最新
トピックス

徒然なる
ままに。